

電力王・福澤桃介

軽薄な私が如何にして成功者となりしか

江上 剛

最終回

第十章 桃介流に愉快に生きる

1

私は出世してしまった。それも大方の人が想像もつかなかったほどに。福澤先生みくぞわの門下生の中で私ほど出世した者、事業で成功した者はいないといっても過言ではないだろう。

それは全て電力事業に全力を注いだ結果である。私は、相場師から実業家への転身に見事、成功してみせた。

私のような軽薄で、根無し草のような男でも実業家として成功することができたのは、電力事業が多くの人に必要とされていたからだろう。私は、運よく電力事業と出合い、これを一生の仕事であると思いつめたのが良かったのだろう。

大正六年（一九一七）、木曾川きそがわの賤母発電所建設に着手して以来、

大正十五年（一九二六）までに大桑、須原、大井、読書、桃山、落合と立て続けに七つもの発電所を建設したのだ。

その間にも、大正十年（一九二一）には木曾山脈南部から三河湾に流れ込む矢作川上流の串原発電所を竣工させた。ここを運営する矢作水力株式会社の社長には、北海道炭礦鉄道で世話になった井上角五郎氏に就任してもらったのである。丸三商會が破綻し、信用失墜した私を引き上げてくれた井上氏へのささやかな恩返しのもりだった。

これらの発電所建設の中で白眉は、なんといっても大正十年着工、同十三年（一九二四）に竣工した大井発電所である。これの成功が私のその後の運命を決めた。

これは本邦初の高堰堤、すなわち木曾川を堰き止めてダムを造り、その貯めた水を落とす高低差で発電する発電所である。

当時、ダムなどという言葉も聞いたことがなかった。また暴れ川として名高い木曾川を堰き止めることができるなど、想像する者はいなかった。

木曾節にも「男なかのりさん 男伊達ならあの木曾川の 流れくる水止めてみよ」などとうたわれているほどであった。

それまでの発電所は水路式や流れ込み式といわれるもので、河川から水路に水を流し、落差の激しい箇所発電所を建設するのが一

一般的だった。だが、大井発電所を建設する予定の恵那峡では落差があまりなかったため、高堰堤式が相応しいということになった。

しかし、なにせ本邦初である。さらに私が木曾川を堰き止めるといふ情報が流れると、灌漑用水がつかえなくなるとか、川が干上がるといった噂を流布する者が現れ、反対の声が大きくなった。まずはこうした声を抑えなくてはならない。私は、灌漑用水に支障が発生すれば、必ず十分な補償をしないといい、またダムで貯水することで渇水期にも灌漑用水が確保でき、不利益ばかりではないと反対する者たちを説得した。

しかしなかなか納得しない者たちは、「ダムが壊れたらどうするんだ。俺たち下流の村は全滅するじゃないか」と主張し、岐阜、愛知両県議会に反対陳情を行ったのである。

私は、県議会議員や反対派に対して発電所建設の必要性を訴えるとともに、世界最高のアメリカの技術を使って完璧なダムを建設するから安全であると熱弁し、なんとか反対派を説得した。

こうして、ようやく着手にこぎつけたものの、難問が次々と私を苦しめた。

発電所建設所長として頼りにしていた、堰堤工事では当代随一と言われる佐野藤次郎工学博士が、コンクリート用に山砂か川砂のどちらを使用するかという問題で社内の合意が得られず辞任してしま

ったのである。佐野博士が仕事を投げ出してしまったら、堰堤工事が不可能であると途方にくれたが、私は人の運には恵まれていた。

アメリカに高堰堤の調査のために派遣していた石川栄次郎えいじろうが帰国

し、後釜あとがまとして思いのほか頑張ってくれたのである。

実は、工事現場ではアメリカの技術顧問団と日本の請負業者とのそりが合わず、トラブルが続いていた。

そこで石川は、顧問団の引き揚げを提案してきた。私は大丈夫なのかと懸念を口にしたが、石川は、「トラブルは感情的な問題にまでなっています。関係修復は難しいでしょう。幸い最新鋭の機械が導入されており、これを使いこなせばアメリカ人がいなくても工事は進められます」と答える。そこまで言うならと、私はアメリカ人の電気機械の技師を一人だけ残して顧問団には帰国してもらった。その結果、ようやく請負業者の間に自分たちがやらねばならないとの気運が盛り上がり、工事が順調に進み始めた。

今回のことで私は、石川のリーダーシップに感心したのである。問題を解決するには、リスクはあっても身を切るような大胆な決断が必要なのだ。

工事は、その後も台風や洪水などでたびたび中断を余儀なくされたが、それでもなんとか前進していた。

だが最悪の事態が襲ってきた。関東大震災である。

大正十二年（一九二三）九月一日、東京及び南関東を甚大な地震が襲った。死者、行方不明者は約十万人という大地震であった。

その際、被害の大きかった東京では朝鮮人が井戸に毒を撒くなどの流言飛語が飛び交い、各地で暴動や残酷な行為が発生した。

騒然とした空気は、工事現場にもただちに流れ込み、火薬庫が襲撃されるといふ情報が入った。現場では銃を装備した警備員を配置し、警戒に当たっていたが、ある時、非常ベルが現場一帯にけたたましく鳴り響いた。

これは後で間違いだと分かったのだが、夕食時に酒が入り、酔っぱらっていた現場作業員たちが、すわ、一大事と火薬庫に集まり、騒ぎ出した。これに驚いた警備員が発砲し、騒ぎに火を点けてしまったのである。作業員と警備員が興奮してにらみ合い、一触即発状態となってしまった。

なんとか両者の激突は回避できたものの、非常ベルを押した者を探し出せと作業員たちは日本刀など凶器を振りかざし、変電所に押し寄せる事態となった。非常ベルを誤って押した担当者は、命からがら裏山に逃げるはめになった。

この騒ぎは、作業員たちの酔いが醒めると収まったのだが、なんともならないのは資金不足だった。

関東大震災は首都東京を直撃したため、その経済的影響は全国に

及んだ。多くの企業が壊滅的被害を受け、振り出した手形が決済できなくなってしまうのである。その額、約二十一億円（現在価値八兆円以上）。いわゆる震災手形問題である。

大蔵大臣井上準之助じゆんのすけは、ただちに支払い猶予令ゆうよ（モラトリアム）を発し、手形決済の猶予を命じた。

その後、震災手形割引損失補償令を施行した。

これは決済困難になった手形を市中銀行から日銀に持ち込み、再割引させるというもので、政府が一億円を限度に補償するという。その結果、約四億三千万円の手形が持ち込まれた。その中には震災とは無関係の手形も多くあったらしい。

こうした金融混乱は、後に昭和金融恐慌を引き起こすことになるのだが、当然、電力需要は壊滅的に減少した。さらに金融逼迫ひっぼくを見越して多くの企業が資金調達に走ったため、社債金利が年利八%から一〇%近くにまで上昇してしまった。たとえ資金調達できたとしなくてもこんな高利を支払っていたら、経営は成り立たない。

私は、これでは工事を中断しなくてはならないと思った。しかしそれでは投資した約一千万円が無駄になってしまう。

そしてそんなことよりも、私の会社である大同電力が破綻はたんし、一生の仕事と思ひ定めた電力事業が頓挫とんざすることが問題だ。

これでは、何者でもない、福澤桃介ももすけになりたいと願って走ってき

た人生が終わってしまったのではないか。

私は、この時ほど必死に頭を巡らせたことはない。そして閃いためいらいひのは「外債がいさい」である。

第一次世界大戦で戦勝国となったアメリカには、過剰ともいえるほどの資金が余っていた。そこで日本の銀行に頭を下げるより、アメリカで資金調達しようと思いついたのである。

しかしアメリカには排日的な黄禍論こうかが広がっていた。日本は日露戦争に勝利し、第一次世界大戦でも勝ち組につき、漁夫ぎよふの利とでも評すべき戦果を挙げた。今まで極東の小国あなごと侮っていた日本を、アメリカは脅威きょういに感じ始めたのである。

また多くの日本人移民が、ハワイやアメリカ大陸に押し寄せていたため、アメリカ国民は、日本人に仕事を奪われるのではないかと、この恐怖心に駆られていた。

日本に危機感を抱いたアメリカは、大正十二年にいわゆる排日移民法を連邦議会に提出し、翌年には成立させるのである。

しかし、アメリカは面白い国である。黄禍論の高まりの中にあっても、関東大震災に際してカルビン・クーリッジ大統領は、軍に命じていち早く救援物資を届けたばかりではなく、国内に義援金募集を呼び掛けたのである。そして、なんと約八百万ドルを集め、日本に贈ってくれたのである。勿論もちろん、最大の支援国となった。

アメリカなら資金調達が可能ではないか。

私は、外債発行の経験は初めてではない。北海道炭礦鉄道で井上角五郎社長を説得し、英国外債百万ポンドの発行に成功したことがある。

私は外債導入を決断した。金額は二千五百万ドルと巨額である。

私の決断を聞いた者たちは、「外債は外災である。アメリカに支配されてもいいのか」と批判したり、「排日を煽るアメリカに頭を下げて金を借りる桃介に天誅を下す」と騒いだりと、物騒な状況となった。

ある大物財界人からは「狂気の沙汰だ。桃介の命運も尽きたな。

電力事業とかなんとか言っていたが、木曾川を掘りまくっただけではないか」と嘲笑された。

しかし、そんなことには構ってられない。私のいいところは、決断が早く、躊躇ちゆうちゆうしないところだ。

世間一般の経営者であれば、アメリカから相手にされなければ恥をかくとか、失敗したら信用失墜するとか、迷った挙句に決断をせず、事業縮小を選択するのではないだろうか。これでは坐ざして死を待つと同義である。

だが私は違う。一度は、どん底まで落ちた人間である。もしここで再び信用失墜しても、大したことはない。失ったものはまた取り

戻せばいいのだ。

大震災後で最悪の景気だが、必ず復興需要が起き、その時はかつてないほどの電力が必要になるだろう。私には電力事業の未来への強い確信があった。

外債発行計画を知ったアメリカの財閥ざいばつジロンリード商会が、関心を持ってくれた。しかし日本とアメリカはあまりにも遠い。やはり直接会って相談しなければらむ埒が明かない。私はアメリカへと旅立つことを決意した。絶対に資金調達に成功してやる、と強い決意を抱きいだつつ……。

2

私はアメリカで暮らした経験がある。そのため、いささかでもアメリカ人の気風を理解しているつもりである。

アメリカ人はたとえ黄禍論が吹き荒れていたとしても、私が堂々と発電所計画を説明し、それに妙味があると判断すれば、競って投資してくれるはずである。

大正十三年五月十三日、私は秘書の師尾誠治もろおせいじを伴ってプレジデント・グラント号に乗り込んだ。

私が持参したのは、越中えつちゆうふんどし五十本、太いマニラロープ一本、

二十円金貨二百五十枚である。

大量のふんどしは、汚れた下着は恥なので毎日使い捨てするため、マニラロープは高層ホテルの宿泊時に、万一、火災に遭った際の避難用、金貨は、黄金好きのアメリカ人を信用させるためである。

同年五月三十一日、ジロンリード商会本社のあるニューヨークに到着した。宿泊はプラザホテルである。

旅装を解き、窓の外に目をやると教会が見える。私は、師尾を連れて礼拝に出かけた。

西海岸と違って東海岸のニューヨークでは日本人は珍しい。その日本人が教会にやってきたと評判になった。

私はキリスト教徒ではないが、郷に入れば郷に従えと言うではないか。私の行動は、ホテルに出迎えにきたジロンリード商会の幹部たちにも非常に好印象を与えたのだ。

しかし外債交渉は遅々^{ちち}として進まない。これは予想外だった。大同電力の事業内容、大井発電所の工事現場の写真など、資料を駆使して幹部たちに説明するのだが、日本という国を知らない者たちは、私が作成した資料を信じないのである。これには困った。

一月、二月と無駄に過^{ひたつ}ごすことになった。絶体絶命である。なんとかしなければと焦ったが、どうしようもない。

私はホテルのバスルームで越中ふんどしを洗い、干していた。毎

日取り換えるふんどしを捨てるにしても、汚いまま捨てるのは日本人の恥だと思い、洗っていたのだが、ニューヨークは美しい街でふんどしを捨てる場所がない。毎日洗濯しては、それを干し、新聞紙に包んで持ち歩いていたのだ。

日本を出て、早や二か月。今のところ何の成果もない。日本では私のことをあざ笑っていることだろう。やはり無謀だったのだ。アメリカが日本に金を貸すなどというのは夢物語だ。私を批判する声が聞こえてくる。しかし、無心でふんどしを洗っていると、不思議に心が落ち着いてくる。

帰国後に聞いた話だが、作業員の手配などで世話になっている名古屋の侠客、宇野安太郎が、私のことを悪し様あざまに言う大同電力の社員を殴り倒したというではないか。

宇野は、日ごろから私と親しくしてくれている。さっぱりとした男気のある人物である。

今回のアメリカ行きについても、外国の金で日本を強くしようとしていると、高く評価してくれていた。私の行動を非難する財界人なんかより、よほど大局観がある。

なぜ社員を殴ったかというと、宇野が汽車に乗っているときに、数人の大同電力の社員が、私の悪口を言っていたらしい。アメリカに金を借りに行くなんて馬鹿だとか、大同電力もこれで終わりだ、

転職を考えようなどとでも話していたのだろう。

それを聞きつけた宇野は、「貴様ら、ご主人の悪口を言うのか。親の心、子知らずとはこのことだ」と怒鳴り、社員を懲らしめたという。

社員は優秀で将来を期待されていた者たちだが、侠客の宇野に土下座して謝った。

愉快ではないか。私は以前、松永安左工門まつながやすぎ えもんに言ったことがあるが、どうしても人員整理したいときには優秀な社員から臍くびにするべきだと考えている。

彼らは会社の業績が悪くなったら、すぐに逃げ出そうと考える。自分の能力に自信があり、もっと良い会社に移れるからだ。ところがあまり期待されていない社員は、そういう訳にはいかない。臍くびになつたら、その日から路頭に迷う。彼らは、必死で会社を立て直そうとするだろう。それが自分たちが生き残る道だからだ。

今回の宇野の話聞いて、私の考えが正しいと分かった。誰が、私同様に、あるいは私以上に会社を愛してくれているのか、よく見極めねばならない。

このままなんの成果もなく帰国するわけにはいかないと思っていたが、ジロンリード商会の総帥であるジロンリード氏が、ロンドン出張から八月初めに帰国するとの情報が舞い込んできた。

「師尾、これで決めるぞ」

私は、ジロンリード氏との直接会談で、外債交渉を決着させると決意した。まさにふんどしを締めて会談に臨んだのである。これでだめなら持参したマニラロープで首をくくらねばならない。

会談当日、私は、ジロンリード氏に向き合った。そして日本及び大同電力が投資先として如何いかに相応しいか熱弁した。留学で鍛えた私の流暢りゅうちょうな英語に、ジロンリード氏は驚いていた。この時ほど、私の無理を聞いてアメリカ留学を許してくださいと福澤先生に感謝したことはない。

福澤先生の持論であった、本格的な水力発電の夢が叶うかどうかの胸突き八丁である。きっと私に福澤先生が乗り移ったのだろう。

私の説明を聞いていたジロンリード氏は「オーケイ」と言い、笑顔で握手を求めてきた。私は、全身の力が抜けるほど安堵あんどした。

「最初から二千五百万ドルは無理だが、第一回で千五百万ドル。残りはその結果を見て来年ということ、どうですか」

ジロンリード氏は言った。

「それで結構です」

私は答えた。

大筋が決定され、返済条件などの細部の詰めになった。

ジロンリード商会側は、将来の貨幣法の変更の如何いかんにかかわらず、

現在のアメリカの貨幣法に基づく一ドルの金の純度と量目りようめを基準にするという条件を提示し、「それでよろしいですか？」と聞いてきた。

私は、即座に「大丈夫です。日本も貴国と同じ金本位制を採用しております」と答え、「ほら、この通り、金貨が流通しております」とポケットから金貨を掴つかんで出して見せた。

「お前もお見せなさい」

私は隣に座る師尾に言った。師尾も私に促され、ポケットから金貨をテーブルに出した。その総数二百五十枚。

ジロンリード氏は勿論のこと、幹部たちも皆、テーブルの上に積み上げられた金貨に驚いた。

私ばかりではなく、秘書の師尾までが大量の金貨を所持していたことにも驚いたのだ。

ジロンリード氏は、金貨を手にとって、その細工の見事さに感嘆していた。

表には菊花の紋、裏は桐きりの紋などが彫刻されている。正直に言って、驚わしやインディアンインディアンの横顔が彫刻されたアメリカの金貨よりも細工が細かく美しいと私は思っている。

ジロンリード商会の人たちは、日本ではこんな美しい金貨が普通に流通していると思っただけではないか。

明治新政府は、大隈重信おおくましのぶが中心となって新しい貨幣制度をイギリスに倣ならって銀本位制に決めようとしていたが、貨幣制度などの調査のためにアメリカに行っていた伊藤博文いとうひろぶみから待ったがかかった。伊藤は、世界の趨勢すうせいは金本位制であると主張したのだ。

そこで大隈は、伊藤の強い意見をいれて金本位制を採用することを建言した。

そして明治四年（一八七二）、金本位制の新貨条例を布告したのである。その後、明治三十年（一八九七）に貨幣法が施行された。私がテーブルに出した二十円金貨は、その法律に基づく金貨である。

「日本はこんな素晴らしい金貨が流通しているのか」
ジロンリード氏が聞いた。

「はい、国民は誰でもこのような金貨を使用しております」

私は、笑みを浮かべながら答え、師尾にも「そうだな」と念を押した。師尾は少し慌てた様子で、「その通りでございます」と答えた。

実際には、誰もが金貨を持っているわけではない。かなり誇張こちやうしたが、全く嘘というわけではない。

金貨はアメリカ人の信用を得るために役立つとは思っていたが、これほどだとは思わなかった。

千五百万ドルの外債は年利七%、償還期間二十年で発行され、即日完売という人気ぶりだった。黄禍論はどこかに吹っ飛んでしまっ

たのである。

残り一千万ドルは翌年、年利六・五%、償還期間二十五年で発行できた。これも大人気で完売となった。

大型外債を発行することができたおかげで、大同電力の経営危機は去った。私は、賭けに勝ったのである。日本で私の失敗を望んでいた連中に、「ざまあみろ」と叫んでやりたい気持ちだった。

私は帰国に際してプラザホテルの大広間を借りきって、関係者を招待するパーティを催した。

ジロンリード氏、ジロンリード商会の幹部とその妻たち、第二十七代大統領ウイリアム・タフト氏、モルガン財閥大幹部トマス・ラモント氏、上院議員など政財界の大物たちばかりである。三十数年前の留学時代の友人たちも招待した。

私は彼らの前で、「アメリカは、今や世界最大の富強を誇っておられます。連邦準備銀行の金の保有額は百二十億ドルに及ぶと承ります。その工業は、広汎な国土と、極めて豊富な天然資源を擁して、世界に覇を称えられることは誠に慶賀の至りと存じます。しかし、米国は黄金の毒素によって、今にローマのように衰亡する道を歩いているのではあるまいか。その米国から金の毒を、わずかながら取り出してやろうとする私は、実はアメリカから感謝されていいはずであります」と挨拶した。

さらに加えて、今回はアメリカに金を貸しに参ると言い、モルガン財閥のラモント氏に「私の言ったことをしっかり覚えておいてください」と名指したのである。

ラモント氏は、苦笑していた。

私は、アメリカに借金をするために来たのであるが、頭を下げるような卑屈ひくろな振る舞いはしない。

堂々とした態度とスピーチは、パーティの参加者に大好評で、大きな拍手に包まれた。

アメリカ人は卑屈な人間より、威厳を持ち、堂々と自分の意見を開陳する人物を評価する。私は、そうしたアメリカ人気質を承知していた。

アメリカでの外債発行成功で、大正十三年に大井発電所、大正十五年に落合発電所が完成し、私の電力業界での地位は確立された。

大正九年（一九二〇）に木曾電気興業、日本水力、大阪送電を苦勞の末に合併し、大同電力を発足させた。私は、その社長であったが、それに加えて東邦電力の取締役であり、さらに長男駒吉こまきちが、井上角五郎の跡を継いで経営する矢作水力電気などを実質的に支配していた。私が関与する電力は、一四〇万キロワットにも上った。

日本の五大電力会社と言えば大同電力、東邦電力、東京電灯、宇治川電気、日本電力であるが、一四〇万キロワットは五大電力の総

発電量の約四五%である。

私はついに、電力王と言われるようになったのである。

軽薄で、目立ちたがり屋で、なかなか一か所に腰を落ち着けることができない私だったが、電力事業と出合い、これを一生の仕事と思いつめたことで、ついに頂点を極めることができたのである。

これは私に実力があつたというわけではない。今ならはつきり分かる。「運鈍根」が重要である。幾多の危機を乗り越えてこられたのは、やはり「運鈍根」のおかげであろう。

しかし、これだけでは不足だとも言える。これに付け加えらるれば、次の二つである。

一つは、自分のことを「世界で一番偉い」と思うこと、もう一つは「世界で一番幸福者」であると思うことである。

なんとという無邪気で理屈に合わないことを言うのかと嘲笑する人もいるだろう。また桃介はやはり傲岸不遜、謙虚さの欠片もないと批判する人もいるだろう。

だが、考えてもみよ。

私は、丸三商会の破綻で信用失墜し、どん底に落ちてしまった。福澤先生の門下生の面汚しとまで批判され、友人たちの多くも去っていった。

そんな時、自分のことを「世界で一番偉い」と思えば、腹が立つ

たり、卑屈になったりすることはない。私のことを嘲笑したり、批判する者たちの方が馬鹿なのだから、相手にしても仕方がない。自分の本分を忘れず、黙々と仕事をし、秘かに掲げた自分の目標への歩みを続ければいいのだ。

もう一つの「世界で一番幸福者」も同じである。私は、仕事に脂あぶらが乗り切っていたころ、病に倒れた。結婚し、子どもも授かっていた時だった。将来に暗澹あんたんたる雲が覆い、失意に胸を痛めた。

働き盛りで病を得ることも、自分の勤めている会社が倒産し、仕事を失うことも、他人に騙され、金を奪われ、貧乏になることも、決して他人事ではない。いつ自分に降りかかるかもしれない不幸だ。しかし、そうした時、自分を「世界で一番不幸者」だと思ったら、絶対に立ち直れない。

これらの不幸は自分を幸福者にするための試練であると思うのだ。こんな試練に遭う自分は「世界で一番幸福者」であると思いつき、歩み続けるのだ。気づくと、いつの間にか本当に幸福者になっているだろう。

ここまで言っても、成功したから勝手なことを言えるのだと文句を言う人もいるだろう。

実際、その通りで、私も失意の時や病に倒れた時は、なんとという馬鹿者で、なんとという不幸者かと自分を責めたことも事実である。

自殺さえ考え、試みたこともある。

しかし馬鹿者だ、不幸者だと言ってもなんにもならない。私の脳裏に浮かんだのは福澤先生の「独立自尊」という言葉である。福澤先生はいつも私たちに口をすっぱくして「独立自尊」を説いた。

これは釈迦の「天上天下唯我独尊しやか てんじやうてんげゆいがじんぞう」に通じる言葉である。

釈迦は、過去未来、宇宙全体を通じて自分が一番偉い、一番幸福者であり、唯一無二の存在であると言っているのだ。福澤先生の「独立自尊」も同じ意味である。

どんな境遇にあらうとも、一番偉い、一番幸福者、そして唯一無二の存在であるとの信念を抱けば、希望を持って歩くことができるのだ。騙されたと思って実践してもらいたい。

3

私の私的な生活について少し話そうと思う。

私の人生には、母を除いて二人の女性が深く影響している。

一人は妻のふさである。彼女は私の人生をここまで導いてくれた。

ふさは福澤先生の次女であり、私は義母のきん様みそに見初められて彼女と結婚し、福澤家の養子となった。

その結果、福澤先生にアメリカ留学をさせていただき、北海道炭

礦鉄道で社会人として出発することができた。

人生は因果応報、すなわち原因と結果で連続していると仮定するならば、ふさと結婚していなければ、いったいどうなっていたらうか。

かわこえ川越の水のみ百姓の息子である私が、ここまで出世できたかどうかかわからない。

右も左もわからない子どもの頃に、少し他の子どもより優秀だったということで、けいおうぎじゆく慶應義塾に入塾することができた。

決して品行方正な塾生ではなかったが、福澤先生と出会い、ふさと結婚し、岩崎姓を捨てた。そして福澤桃介としての人生が始まった。

これらは全て偶然なのだろうか。そうではないと思うが、はつきりと断言できない。人生は、絶えずY字路に立っている状態である。右か左か、どちらかを選択しなければならない。選んだ道次第で運命が変わる。

私もふさと結婚しなければ運命が変わっていたらう。しかしどんな道を選んだとしても結局、電力事業で活躍する道を見出していたかもしれない。それは誰にもわからない。

私の運命を導いてくれた女性であるにもかかわらず、私はふさの夫としては十分ではなかったと思う。ふさは私を夫として選ばな

ったら、もっと幸せだったかもしれない。

正直に言って、ふさに対しては後悔と反省の念を抱いている。愛していないわけではない。しかしふさは、私以上に福澤先生を愛し、尊敬していたのではないだろうか。

ふさは渋谷の豪壮な本邸に住んでいる。趣味を楽しみながら、何不自由なく暮らしている。

しかし私の事業にはまったく関心がない。かたくななまでに私を無視し続けている。

福澤先生は、きん様を愛し、また非常に子煩悩こぼんのうだった。ふさにとっては、夫や父親のモデルは福澤先生なのである。

私もふさを愛し、駒吉、辰三たつぞうという二人の息子も愛している。しかしその愛し方は福澤先生と違っていたのだろう。

株投資で資金を貯めたり、新しい事業を始めては成功と失敗を繰り返かえしたり、ふさや子どもたちよりも自分のやりたいことを優先してしまった。

私は、これらはふさや子どもたちを路頭に迷わせないためだとの思いで頑張っていたのだが、ふさにとっては事業で成功する夫よりも、自分のことを第一に考えてくれる人を求めていたのだろう。

ふさは、いつまでも福澤諭吉ゆきちの娘むすめだったのである。ふさにとって福澤先生以上の男性はいなかった。私が事業に成功し、どんなに大

金持ちになろうと、渋谷に福澤山と言われるほどの土地を買い、邸宅を建てようとも、その評価は変わることがなかった。

ふさの立場で考えてみれば、彼女は事業に邁進する私をどのよう
に支援していいかわからなかったのではないだろうか。

私は、家庭で孤独だった。仕事を終えて邸宅に帰ってもふさが出迎えることはなかった。お疲れ様の一言もない。これは私の不徳の致すところなのだが……。

言い訳するわけではないか、これではふさの住む本邸宅から足が遠ざかるのも仕方がない。

ふさとの結婚の際、「男尊女卑の旧弊を払い、貴婦人・紳士の資格を維持し、相互に礼を尽くして、もって一家の身を致すのみならず、広く世間の模範たるように致すべきこと」という誓約書を福澤先生に提出した。そして福澤先生から直々に、「ふさを悲しませることだけはしなideくれ」と頼まれた。その約束を果たせていないことには忸怩たる思いがある。

ふさの私への無関心には、他にも原因がある。

それは私の人生に大きく影響しているもう一人の女性、貞奴だ。貞奴とは、塾生の頃に出会った。当時、彼女は葭町の半玉で小奴と名乗っていたが、私たちはすぐに親しくなった。

私の本音を言えば、貞奴と夫婦になりたいと思っていた。ファム・

ファタール、運命の女性と確信したのだ。彼女とは一生、関わり合うことになるだろうという予感がした。

しかし、当時の私は学生の身である。野心もあった。私は、彼女に何も話すことなくふさと婚約し、福澤家の養子になった。

この事実を知った貞奴は、驚き、怒りを覚えたことだろう。私が留学のためにアメリカ行きの船に乗り込もうとする時、見送りに来たのである。

「あの人は誰？」

ふさは私に聞いた。その怪訝けげんで、不安に満ちた表情を今も忘れることはできない。私は言い訳をし、その場を繕つくろったのである。明らかに動揺していた。

それ以来、ふさは、私の背後に貞奴の影を見るようになったのである。

福澤先生は、きん様一筋で他の女性に心を奪われるということはなかった。夫婦というのは、それが当然のことだと思ってふさは育ってきた。

ふさは私のことを、女性にふしだらな男性だと疑ったのではないだろうか。

貞奴は私と別れた後、葭町の名妓となり、そして川上音二郎かわかみおとじろうという壮士芝居そうししばいの役者と結婚し、芸者の世界から足を洗った。

結婚に際して、貞奴は音二郎を男にすると言ったという。福澤諭吉の養子になり、出世のレールに乗ったかに見えた私への当てつけと考えるのは、うぬぼれだろうか。

結婚生活は波瀾万丈だったようだ。

音二郎は、貞奴の援助でヨーロッパに留学し、帰国後、歌舞伎座を借り切るくらいの人気役者となった。乗りに乗った音二郎は、貞奴に支援してもらい自前の劇場まで作ってしまったのである。しかし上手いはず、劇場はたちまち人手に渡ってしまう。

音二郎が次に挑んだのは衆議院選挙。役者だけでは満足しなかったのか、政治家になろうとしたのである。ところがあえなく落選。劇場建設、選挙出馬で大いに借金が嵩んでしまった。

一方、家庭生活では、貞奴との結婚前から別の女性と関係し、子どもをもうけていたことが発覚したのである。

音二郎に翻弄され続ける貞奴は、離婚しようと思っただろうが、生来、勝気な女性である。このままではいけないと覚悟を決め、なんと二人で小舟に乗り込み、日本脱出という無謀なことに挑んだ。

だが、そんなことができるはずがなく、二人は遭難し、散々な目に遭った。九死に一生を得た二人は、後援者を得て、「川上一座欧米巡行団」を結成し、一旗揚げるとの企てを執行した。貞奴と音二郎は、アメリカに渡ったのである。

この欧米巡業が、貞奴の運命を劇的に変えた。
劇場主の意向で、貞奴はやむを得ず舞台上がることになったのである。

この時、貞奴は芸名を「サダヤッコ」とし、『道成寺』どうじょうじを踊った。これが大評判となり、アメリカのみならずヨーロッパまで興行の足を延ばすこととなった。

明治三十四年（一九〇二）一月、貞奴と音二郎は神戸港に凱旋帰がいせん国。埠頭ふしづには、女優貞奴を一目見ようと群衆が押し寄せた。

その頃、私は丸三商会を倒産させ、信用絶無の状態に陥っていたばかりでなく、肺結核が再発し、人生最悪の状況だった。

最悪の状況はこれだけではない。その年の二月に福澤先生が亡くなってしまった。福澤家にとっても大きな悲劇であり、転機となったのである。

貞奴は、その後も女優として大活躍した。私の方も福澤先生亡き後、心機一転、株投資や電力事業で実業家として成功したのである。有名女優となった貞奴と財界のパーティなどで顔を合わすことがあったが、私は節度を守って、なれなれしくはしなかった。顔を合わせても笑顔で「元気か?」「元気です」と言葉少なにかわす程度である。

人気女優は、国民の財産のようなものである。私は近づくことを

遠慮していた。

しかし、ふさは依然として疑いを抱いていたようだ。貞奴の人氣が上がるにつれ、私への態度がさらに冷え冷えとしてきたからだ。

だが、女優という人氣商売もいずれ下り坂になってくる。それは仕方がないことである。

明治四十四年（一九一三）十一月十一日、音二郎はぶくまくえん腹膜炎を患い、亡くなってしまふ。

貞奴は勝気で負けず嫌いである。しかし音二郎亡き後、劇団を率いるのは困難を極め、私は女優引退を勧めた。

貞奴は抵抗していたが、ついに大正七年（一九一八）十一月、大阪中座なかざの公演を最後に二十年間の女優生活に終わりを告げたのである。

私が女優を辞めるように説得した理由は、私の事業上のパートナーになつてほしいというものだった。

貞奴は、愛人になれというのであれば、拒否すると言つた。音二郎は亡くなったが、自分はいつまでも音二郎の妻であるからだと言ふ。

私は、貞奴の性格をよく知っている。勝気で、決して媚こびたりしない。成功者である私に頼つて生きようとはしない。

貞奴は、私のファム・ファタールである。私、五十一歳。貞奴、

四十八歳。ようやく運命の糸が交錯したのである。

貞奴には、まだまだ女性としての魅力がある。それに人気が下降したとは言え、有名女優である。そんな彼女をパートナーにすれば、たとえ事業上であると言っても、世間は愛人だと騒ぎ立てるだろう。

さらに言えば、ふさの心を大いに乱すことだろう。また福澤家の人たちからも、私の不道徳さに批難が集まるに違いない。

しかし、構わない。この機を逃したら、再び運命の糸は断ち切られてしまう。

「事業上のパートナーっていうのはどういうことなの？」

貞奴が聞いた。

「私は、今、愛知県の本曾川流域で発電所を造り、電力事業を行っている。これは私にとって天命だと思っている。この事業には多くの財界人や欧米諸国の人たちが関係し、かつ関心を寄せている。そこで君に頼みたいのは、君の社交性で、こうした人たちを惹きつけてもらいたいんだ。それが事業の成功に繋がると信じている。だから事業上のパートナーなんだ。私は君のために屋敷を作る。そこで彼らをもてなしてほしい」

「あなたの居場所も作るの？」

「そう願いたい。私もその屋敷と一緒に住まわせてほしい。勿論、屋敷の名義は君だ。君が主人だ」

「一つ屋根の下に私とあなたが一緒に住むのね」

「そういうことになる。だけど男と女の関係にならなくてもいい。

あくまで事業上のパートナーだよ」

「それで本当にいいの？」

「ああ、いい。私にはふさという妻がいるからね」

「わかりました。私はあなたの事業が順調に行くよう、最大限の努力を惜しまないことを誓います」

貞奴はにこやかに言った。

「でも世間は、君のことを愛人だとか、妾めかけだとか言うに違いない。それでもいいのか？」

「構いません。今までも世間の中傷に耐えてきましたから。どんなことがあっても私は、今も、これからも川上音二郎の妻であります」

「それでいい。正直に言うと、私の結婚生活には問題があるんだ。妻のふさが、私に全く関心がない。だから本宅に戻っても心が休まることがない。今、君と話をしている、昔を思い出したわけでもないだろうが、とても落ち着く。心が穏やかになる。この気持ちをおあした事にした。人生なんてこの先、どうなるかわからない。朝に道を聞かば、夕べに死すとも可なり、という言葉もあるだろう？ だから後悔したくない。君と一緒に時間を過ごすことで安らぎを得たいんだよ」

私は、わずかに表情を曇らせた。貞奴は、悲しみとも笑みとも判然としない複雑な表情を浮かべ、私を見つめた。

「末永くお世話になります」

貞奴は頭を下げた。

4

私は、名古屋の東二葉町ひがしふたばちょうに二葉居を造り、その管理運営を貞奴に任せた。

敷地面積二千坪。かつては武家屋敷が立ち並んでいた高台の地である。

赤瓦あかがわのコンクリート製の塀あかがわがぐるりを囲み、石の門柱をくぐるたまじやりと、玉砂利の道が続く。

屋敷は、赤瓦葺の二階建て。屋根には高い煙突があり、洋風となっている。

内部は応接間、宴会場、茶室、書生部屋、女中部屋、執務室などを備え、使用人は執事、行儀見習いを含めて女中が十人ほど。書生、コック、ウェイター、植木職人などがある。

彼らは、貞奴の指揮の下で、私のところに来る客たちを心から満足させるもてなしを供したのである。

貞奴は、私の健康管理にも気づかい、宴会があっても私を早めに休ませるなどした。客たちも私の接待より、元有名女優貞奴の方を喜んだ。

「この居候いそうろうですから」と私が自虐じぎやく的に言うと、客たちは大いに笑ったのである。

私は、ようやく自分の居場所を得ることができ、仕事にもますます身を入れ始めた。

世間は、事業で成功した私が貞奴の色香に迷って、鼻の下を伸ばしているやゆと揶揄し、そんな噂も聞こえてきたが、私も貞奴も気に留めない。わざと人前では親し気な様子を見せ、噂の火を燃え上げながら、面白がっていた。

私と貞奴との関係は、普通の人間には理解できないだろう。男と女が一つ屋根の下に暮らし、男女の生臭い関係が一切ないのだから。信じろと言っても信じられないに違いない。

貞奴は、あくまで亡くなった音二郎の妻であり、私とは事業上のパートナーだった。

この関係は、ふさばかりではなく、福澤家の人たちにも理解はされなかった。ある日、義兄の捨次郎すてじろうが私の行動に苦言を呈するためやって来た。

私は、貞奴を紹介し、世間でいう愛人ではないとの理解を得るた

めに説明したが、疑いは晴れなかったに違いない。

ふさのことを気に掛けないわけではない。しかし時々、渋谷の本宅に戻っても、一人で冷たくなった食事をするだけで、ふさと会話を交わすこともない。食事と同じく冷え切った部屋の空気に身を震わせた。ふさを責めたり、詰ったりはしない。全ては自分が蒔いた種である。

貞奴が事業上のパートナーであると実感したエピソードがある。

大井発電所の建設現場での出来事だ。工事は難航を極めていた上に、現場では作業員たちが待遇に不満を漏らし、倦怠気分が横溢していた。

私が作業員たちの士気を高めようと現場に向かおうとすると、貞奴が同行すると言う。男ばかりの荒々しい現場だと伝えたのだが、どうしても行くと聞かない。仕方なく貞奴を同伴して現場に向かった。

ダム建設現場は崖の上である。はるか谷底を覗き見ると、作業員たちが小さな人形くらいにしか見えない。地獄に吸い込まれるような恐怖心で足がすくむ。

工事現場には谷底に向かって直径約一五センチメートルもの太いケーブルが張られ、それにゴンドラが吊り下げられている。機材などを谷底に降ろすためだ。

私は、足の震えを抑え、崖の際に立った。眼下で作業員たちが仕事をせずにたむろし、こちらを見上げている。

あまりにも離れているため彼らの表情は判然とせず、声も聞こえないが、「偉いさんが来て、何をしようというのかね」との意地の悪いことを言い合っている様子が察せられる。

こういう時は、外連味けれんみのある行動であつと言わせるに限ると思ひ、私は、「あのケーブルで下に降りられるか」とゴンドラを指さした。ゴンドラに乗り、谷底に降りられるかということだ。

「緊急の場合に人が乗ることはありませんが……。人間を乗せるものではありません」

現場責任者が困惑気味こんわくに答えた。

「あれに乗って下にいる作業員たちの陣中見舞いに行こう」

私は言った。

「社長、絶対にお止めやください。もし突風でも吹こうものなら崖に激突して粉微塵こなみじんになってしまいます。またケーブルが切れたり、外れたりしたら、六〇メートル下の谷底に落ちて、命はありません」

現場責任者は真面目まじめな顔で言った。

「構わん。工事を順調に進めるためだ。私自らが作業員たちを励ますのが一番効果的だ」

「社長、お止めください」

同行した重役たちも引き留める。

「行くぞ」

私はゴンドラに乗り込んだ。「誰か一緒に行くか？」

私は、重役たちに声をかけた。しかし誰も返事がない。お互い、顔を見合わせるだけで、尻込みしている。中には、その場にしゃがみ込む者もいた。恐怖心のためか、それとも断じてゴンドラには乗らないとの意思表示のためか。

その時だ。

「私がご一緒致しましょう」

貞奴がゴンドラに乗り込んできた。

これには私が慌てた。重役たちが尻込みする危険なゴンドラに貞奴を乗せるわけにはいかない。本音を言えば、私だって乗りたくはない。怠業気味の作業員たちに活を入れるために、やむを得ず私一流の派手なことをやろうとしているのだ。

「さあさん」私は貞奴のことを「さあさん」と呼ぶ。「君は乗せられないよ」

「構いません」貞奴は私の隣に座ると、係員に「動かしなさい」と命じた。

係員は、真剣な表情でゴンドラを動かすスイッチを押した。

私は、ゴンドラの鉄枠をしっかりと握る。貞奴は、膝に手を置き、

微動だにしない。

ゴンドラはゆっくりと谷底に降りていく。時折、風に揺られてぐらりとすることがあり、声を上げそうになるが、貞奴は動じない。

長い時間が経ったような気がしたが、さほどではないのだろう。

無事に谷底に着いた。私と貞奴がゴンドラを降り、笑顔で作業員たちに手を振ると、息を呑んで見ていた崖上の重役たちや現場責任者から歓声が沸き起こり、現場の作業員たちも拍手で出迎えてくれた。

荒くれ男ばかりの作業現場に、突然、美人の誉れ高い元有名女優がやって来たのである。男たちは興奮した。

私が作業員たちを励ますスピーチをしている間、貞奴は飯場に入り、昼食の準備に取り掛かった。私は、貞奴の行動に感心した。女優であったことをひけらかすのではなく、すぐに昼食作りという裏方に回ったからである。

その後、私と貞奴は現場の作業員たちと車座になり、貞奴が握った握り飯を食べた。それ以来、男たちの士気は大いに高まり、作業は順調に進むようになったのである。

私は、作業員たちとなんのてらいもなく談笑する貞奴を横目で見ながら、幸せを実感していた。最高の事業上のパートナーを得たとの確信を持ったからである。

大井発電所や大桑発電所が無事完成し、電力事業が成功したのは

貞奴の協力が大いにあったことは間違いない。

妻のふさと事業上のパートナーの貞奴という二人の女性が、私の運命に深く関与していることをわかっていただけたと思う。

ふさと結婚しなければ、私は世に出られなかっただろう。そのことには感謝し、ふさのことも愛している。しかし私の不徳の致すところではあるのだが、妻としては寂しい思いをさせてしまっている。勿論、福澤諭吉の娘としての体面が守られるように生活費は潤沢じゆんたくに渡しているが、夫婦としては形だけになってしまった。

貞奴とは、他の人には理解できないと思われる不思議な関係である。貞奴は亡くなった川上音二郎の妻であり、私の愛人ではない。音二郎に対する嫉妬心しつとしんが全くないとは言わないが、私には貞奴は絶対に必要な女性である。

二葉居で、客たちが帰った後、私と貞奴はたわいもない話をする。たいていは若い頃の思い出だ。一緒に浅草あさくさに行った時のことなどを話していると、私は、たちまち若き慶應義塾の塾生となる。この時ほど、私は安らぐことはない。いつの間にか、貞奴の膝を枕に深い眠りに落ちてしまう。

電力王と呼ばれようと、有り余る財産を得ようと、全てが空しく感じる時がある。いずれは全て死によって消えてしまうからだ。

私は貧乏な生まれから抜け出そうと裕福になりたいと願い、何者

でもない福澤桃介になるのだと決意し、走り走ってきた。
そして思いのほか、遠くまで来てしまったのだが、今は貞奴の膝の上という小さな小さな世界が一番得難く、貴重なのである。私は、これを求めるために走ってきたのだろう。そのことに気づくのに遅すぎたわけではないと思いたい。

5

さて私の人生も終わりに近づいてきた。福澤先生がお亡くなりになった年齢も過ぎてしまった。今では、多くの会社の役員や公職からも引退し、隠居の身である。

私は、自分の始末を考える年齢になり、静かに人生を終えたいのだが、なかなかそうは行かないようだ。というのは、我が国が危うい時に差し掛かっていると思うからである。

昭和六年（一九三一）に満州事変が起きた。これを契機に軍部の勢いが増し、昭和七年（一九三二）には中国大陸に満州国を成立させてしまった。

国内は不景気が深刻化し、国民の間には一発逆転を求める空気が横溢おういっしている。そのため満州国の成立に、我が国の発展の未来を見ているようだが、私は国際的な孤立を招いているのではないかと危き

惧^ぐせざるを得ない。

昭和十一年（一九三六）二月二十六日には、軍部の一部が反乱を起こし、帝都を混乱に陥れた。高橋是清蔵相などが凶弾に斃^{たお}れるという考えられない悲劇的な事態が起きたのである。

反乱は抑えられたものの、これも軍部の力を強くすることになってしまった。私は、暗い気持ちになった。世の中は、加速度的に戦争に向かっていく気配が濃厚である。

同じ年に、我が国の産業を国家の統制下に置く国家総動員法が準備され、それと並んで電力国家管理法も上程される予定がある。全てが軍部の力を強め、戦争に向けての体制が作られようとしている。私が心血を注いで築き上げてきた電力事業も、全て国に取り上げられてしまう。

なんとという馬鹿げた時代になろうとしているのか。軍部の力を強め、戦争を引き起こし、景気が良くなるはずがない。人々が幸福になるわけがない。

我が国は、明治維新以来、日清戦争^{にっしん}、日露戦争^{にちろ}、第一次世界大戦と対外戦争を戦ってきた。

それらは勝利したものの、多くの尊い犠牲^{ぎせい}を払った。それで景気が良くなったか。そんなことはない。一時的な需要拡大や株価高騰^{こうとう}で、景気が良くなったように見えたただけだ。

やはり平和で、私のような民間人が自由に活躍しなければ、本当の景気回復はない。

世間に対する批判はこれくらいにしよう。愚痴ぐちつぼくなっていけない。

さて私は自称、川越の水のみ百姓の出身である。貧しい生まれの私が出ることができたのは、私を見出してくれる人がいたからである。

富貴ふうき顕官けんかんの親の下に生まれてこなかったことを悔しいと思ったことがあった。出生の段階から人生に差がついていることを許せなかった。

誰でも努力すれば出世できると、軽々けいけいに言う人がいるが、それは嘘である。

やはり富貴顕官の家に生まれた者とそうではない者とは、歴然とした差がある。貧しく名もなき家に生まれた者は、そうでない者の何倍も努力しなければ出世できない。ところが実際は、何倍もの努力をしても出世できないことの方が多い。その内に努力に疲れ果て、人生の波に吞まれて海の底深くに沈んでしまう。私のように出世できた者は確率的には稀まれだろう。

運が良かっただけと言われるかもしれないが、私の生き方が支援してくれる人を惹きつけたと言え、傲慢ごうまんだろうか？

では、私の生き方の根本はなんであろうか。それは正直ということだ。

私は、軽薄であるとは度も言ってきた。しかし慎重であるとも。軽薄であるから失敗もし、慎重であるから、株投資で成功した。それらを根本で支えているのは、正直であるということだ。

私は、自分にも他人にも正直である。そうあろうと努めてきた。これが行動などに色々と問題を生じさせたかもしれないが、私を惹きつけてきた理由だろうと考えている。

この正直というのは、会社経営にも大事である。私は、会社経営において嘘は絶対に許さない。算盤そろばんをきつちりと弾きはじ、一銭、一厘りんのごまかしも許さないのである。

私の持論は、正直な経営をしていけば会社は必ず発展するということだ。

今日、不景気なのは不正直な経営がまかり通り、多くの人が会社を信じていないからである。

正直であることなぜ会社が発展するのか。その理由を話そう。事業を拡大するには、多くの資金が必要になる。とても一人では賄まかないきれない。

私は、国内外を問わず膨大な借金ぼうだいをした。借金王キンクであると自認している。

ではなぜ、そんなに借金ができるのか。それは私が正直だからである。

こんなことがあった。私は事業拡大のために、十五銀行などから四百万円の借金をした。頭取は、私の個人保証を要求してきた。これが銀行の慣例だからである。

私は頭取に言った。

私の財産はせいぜい二百万円か二百五十万円。その内、当該会社の株が七十万円ほど。実質は百三十万円か百八十万円である。私は正直に全資産を開示した。

「頭取、私の全財産をもつてしても四百万円の返済は困難である。しかし、もし万が一のことがあれば、私の全財産の範囲内で弁済する。その条件なら保証書にサインするが、どうか」

私の提案に、頭取は「それでいいです」と同意し、財産の範囲内で弁済するという異例の保証を行ったのである。頭取は、私の正直さに、事業の発展と弁済の安全性を理解したのである。

たいていの銀行は、相手の弁済能力や弁済意思とは無関係に、ただただ事務的に重役たちから保証を徴求する。これは全く無意味である。いざという段になっても、保証した重役たちは責任を取ろうとはしない。貸した銀行と借りた会社、保証した重役たちの間で醜態を見苦しく演じることが多い。

その点、私は違う。正直に自分の財産や弁済への覚悟を開示することで、相手が「桃介は信用できる」と思ってくれるから、借金が可能になるのだ。これは外国の投資家相手でも同じである。

不景気だと騒ぎながら、株主が高配当を貪^{むさぼ}ったり、重役だけが高い報酬を受け取ったりしている会社がある。こんな会社が発展するわけがない。

また重役たちが経営悪化の責任を免^{まぬか}れるために、事業上の数字をごまかす会社がある。

好決算、高配当を偽装するのである。当然、自分たちの報酬もたつぷりと懐^{ふところ}に入れる。

こんな会社が発展するわけがない。不正が発覚すれば重役たちは背任罪で刑に服することになるが、それを恐れてさらにごまかしが大きくなる。最初は小さな不正直が、みるみる大きな不正直になるのである。

また、政府頼みでも正直経営でなければ破綻する。台湾銀行がいい例だ。政府の管理下にあるからいい加減な経営でも潰れないと思っていたのだろう。昭和二年（一九二七）の恐慌で経営が破綻した。鈴木商店など二、三の特定の会社に融資を偏^{かたよ}らせていたからだ。

政府の手で、減資などの手段を講じることと清算は免れたのだが、政府頼みの経営ではいけないという教訓にすべきだろう。

正直は、社長だけではいけない。重役たちも社員たちも皆、正直であるべきだ。そのためには社長が監視の目を光らせ、正直な社員を褒め、不正直な社員を愛情を持って叱らねばならない。

特に社員たちは、業績向上が自分たちの給料に反映されるとなると、不正直なことをしてでも業績を上げようとする誘惑に駆られてしまう。

これは社長が悪いのだ。社長が社員たちの気持ちを付度そんたくしないで、発破をかけるからである。不正直な事態を社長が知らなかったでは済まされない。

社長は、自分の足で社員たちの間を歩き、正直が一番である、たとえ業績が落ちることがあっても正直を評価すると言い続けなければならぬ。

さて、我が国の景気を向上させる最上策はなんだろうか。

それは外国資本の活用である。

近時、政府は国際観光協会などという機関を設置して外国人観光客の誘致に努めているようだが、くだらない思い付きだ。

風光明媚ふうこうめいびを売り物にするのもいいが、さほど珍しいものでもない。貧乏詩人でも呼ぶ気なのもかもしれないが、小金を落としていくような観光客には、景色よりも日本の庶民の生きた暮らしを体験させる方が楽しいのではないか。

生活様式が違う日本に来て、狭く窮屈きゆうくつなホテルに宿泊して高い料金を支払わされて夜の銀座を歩いても、パリやニューヨークに勝てるはずがない。

そんなけち臭いといつてはなんだが、観光客誘致よりも外資を日本に投資してもらおうのだ。その方が、よほど景気が良くなる。

そのためには外国の資本家に日本を信用、信頼してもらわねばならない。桃介は日本を外国に売る気なのか、などと目くじらを立てないでもらいたい。外資を積極的に日本へ投資してもらおうことが、経済立て直しの第一歩である。

では、どうしたら外資は我が国に投資してくれるのだろうか。

それは第一義に、当然のことながら産業立国として立ち上がるように国民が一致団結することである。労働条件が悪い、経営者は悪だなどと言いつける暇はない。

外資に資金が余っているからといって、おいそれと投資してくれるわけではない。日本に投資妙味がないといけない。

そのためには金融政策も考えないといけない。外資が流れ込んでくるような金融政策を採用すべきである。我が国の財政が健全化し、多くの会社の内部資本が充実すれば、おのずと我が国の信用は高まり、我が国への投資に魅力を感じるようになるだろう。

ここで再度、繰り返しになるが、外国の資本家の信用を得るには

正直の道しかない。我が国の経営者が、自らを省みて、事業の本来的使命に覚醒し、正直な経営に努めれば我が国の信用はおのずと向上するだろう。

孫子の兵法に「迂直の計」というのがある。いわゆる「急がば回れ」と同義である。

我が国は、明治維新以来、国民が頑張り、欧米各国と肩を並べるほどになった。

しかし慢心してはいけない。「満は損を招き、謙は益を受く」と故事にもあるように、慢心すれば滅びが待っているだけである。

今、我が国が不況に陥っているとすれば、それは慢心の報いであろう。もう一度、初心に返って、産業立国たる我が国の再興を国民一丸となって目指そうではないか。

最後になって、軽薄な私らしくないことを口走ってしまった。

恥ずかしさも込み上げてくるが、私らしく軽薄なことを言わせてもらえば、私の人生は福澤諭吉先生の「独立自尊」の追求だった。

私の独立が我が国の独立になる。私たち一人一人が自立することで我が国が真に豊かな国となる。福澤先生は、深い意味を込めて、この言葉を残された。私は、この年になってもまだこの言葉の深い意味は理解できていないかもしれない。しかし、私はずっと「独立自尊」の道を探して歩いてきたと思っている。

それは思いのほか波瀾万丈ではあったが、愉快な道であった。

諸君！ 人生は短くもあり、長くもある。愉快に生きよ！ 愉快

に生きよ！ 軽薄と言われようと構わない。愉快に生きよ！

人生は生きるに^{あた}価するぞ。

〈完〉